台湾の旅 2024

2024 年 3 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

春節（旧正月）明けの台湾に男女 8 人で行ってきた。最初の 1 週間は北部と南部を地下鉄や観光タクシーなどで回り、その後は男性陣だけでレンタカーを借りて山岳地帯を含めて台湾をほぼ一周してきた。

第一章　旅の始まり

■旅の始まり

今回一緒に旅する仲間たちとは過去に何回も旅をしている。8 年前の地球一周の船旅で知り合い、船内で毎日飲んでいた同世代のオッサンたちだ。ヨコさんはヨットマン、ヒデさんはゴルファー、ヨシさんは山男、説明するまでもないが全員お酒大好きの楽しい連中だ。

実はこのメンバーでかなり前から台湾旅行計画が持ち上がっていた。それはヨコさんが自転車メーカーのイベントで 50 人の隊列を組んで自転車で台湾を一周しており、その後も仕事やプライベートで訪れているので台湾に詳しい。他のメンバーも台湾は初めてではないが、短期訪問ばかりなので一度は時間をかけて隅々まで回ってみたいと思っていた。

女性陣がこの話をどこかで聞き付けたようで、「いつ行くの？スケジュール空けておくね」などとさりげなくアピールしてきた。元お嬢様方はキキちゃん、ミッちゃん、ネーちゃん、チーちゃんの 4 人、オッサンたちとは最近よく一緒に旅行をしている。

男だけの方が無理も効くので当初はやんわり断っていたが、「心配してくれてありがとう、でもお気遣いなく」と全く意に介さず、結局男女 8 人で行くことになった。

かくして「熟年台湾遠征隊」が結成された。

レンタカーを使いたいが、左ハンドルで 8 人乗りの大きな車体は取り回しに難があり、2 台で走るのはさらに難しい。結局は行程を前後に分けて、前半は地下鉄などを使う男女 8 人旅、後半はレンタカーを使う男 4 人旅にした。

旅のプランニングはヨコさんが、宿やレンタカーの手配はヒデさんが担当してくれた。私は台湾へのフライトなどを予約する程度で、個人旅行なのに準備についてはかなり楽をさせてもらった。

【熟年台湾遠征隊の 8 人　中正記念堂にて】

■台湾について

せっかく 2 週間も行くのだから、私なりに台湾の歴史を調べてみた。

その昔、台湾は原住民が住んでいただけで唐や元などの中国の歴代王朝はこの島には興味がなかった。むしろ中国とは思っていなかった。中華思想とは中国本土が世界の中心の“華”で、周辺地域は野蛮人が住んでいるという思想だから台湾も日本も野蛮人の島という位置づけだった。

1624 年、初めて台湾を統治したのはオランダで、統治は 1661 年まで続いた。

オランダ統治が終わった理由は、中国の政変で明が滅ぼされて清になり、明の残党が明再興のためにオランダを追い出して台湾に拠点を移した。しかし 22 年後に台湾は清の支配下になり、それから約 200 年間は清の支配が続いた。

1895 年、日清戦争に勝利した日本が統治した。抵抗もあったが、日本は統治を成功させるためにインフラを整備し、教育にも力を入れたので識字率は大きく向上した。

1945 年、第二次世界大戦で日本が敗北して 50 年間の日本統治は終わり、中国本土と台湾は中華民国（国民党政権）になった。台湾には中国本土から役人や民間人が移り住んで来た。しかし当時の台湾は日本統治により近代化されていて、中国本土から来た人たちは読み書きもできず、水道や電気にも驚いた。そのうえ傍若無人な振る舞いをしたので、台湾の人々は「犬が去って豚が来た」と揶揄した。

しかし翌年には蒋介石率いる国民党と毛沢東率いる共産党が内戦に突入し、国民党が敗れ、共産党が中華人民共和国の成立を宣言した。敗れた国民党は台湾に逃れて中華民国を維持した。

第二次世界大戦後に国連が発足した時は、中国を代表する国家は中華民国で安全保障理事会の常任理事国でもあった。しかし 1971 年、中華人民共和国が中国を代表する国家として承認され、これを不服とした中華民国は国連を脱退した。そして日本をはじめ多くの国は中華人民共和国と国交を結んだ。ひとつの中国を主張する中華人民共和国は中華民国を国として認めず、内政問題としている。そのため国際的には台湾は微妙な立場に立っている。

現在の台湾は選挙により議員や総統を選ぶ民主主義が確立し、資本主義経済により経済発展を遂げ、半導体産業では世界で確固たる地位を確立した。1 人当たりの実質 GDP（国民総生産）は 2009 年からは日本を上回り、2023 年現在では日本の 1.4 倍になっている。
面積は九州より少し小さく、人口は九州のおよそ 2 倍の約 2360 万人が住んでいる。

第二章　台湾北部

■台北
私たち熟年台湾遠征隊は台湾の桃園空港に降り立った。空港から台北市内まで MRT（地下鉄）で行くのが最もポピュラーで、そのために「悠遊カード」を各自購入する。このカードは日本の SUICA のようにチャージして使え、MRT 以外にバスやコンビニでも使える。

台北の中心までは約 30 分。車内は混んでいて空席がない。すると地元の若者が席を譲ってくれた。年配者だからか日本人だからか分からないが、とにかくありがたい。女性 3 人が座らせてもらい、3 人は「謝謝」、「ありがとう」、「サンキュー」と三者三様のお礼を言っている。
この 3 カ国語混在コミュニケーションがこれから始まる旅の基本スタイルになる予感がする。

台北市の人口は約 300 万人、首都だが人口は台湾最大ではない。それは台北市を取り囲むように新北市があって、こちらは約 430 万人いる。新北市は 2010 年に台北県から新北市になったので、私が初めて台北を訪れた 2002 年には新北市はなかった。
台北市と新北市合わせて約 730 万人、台湾の全人口の約 3 割になり完全に一極集中している。

台北市は大都会だが、日本に比べてオートバイが非常に多い。それは貧富の格差が大きいからだろう。インドも似た傾向で日常生活に使うオートバイの台数でその傾向が分かる。
特徴的なことは信号待ちの停止線で、4 輪車の停止線の前に 2 輪車専用の停止エリアがある。インドもオートバイは多かったが、このようなエリアはなかった。2 輪車に乗る人の安全や利便性を考えての処置で、行政サービスのきめ細かさが感じられる。

【台北市内の道路事情】

ホテルに到着する。台北の中心地にあるホテルで 1 階はセブンイレブンとスシローの店舗があり、どちらの店も若者たちを中心に多くの人たちで賑わっている。

ロビーでヨコさんの友人の女性、華陳さんと落ち合う。彼女とヨコさんは自転車で台湾一周をした時に知り合い、苦楽を共にした。日本語ペラペラの彼女から最新の台湾事情やアドバイスを聞き、日本からできなかった予約もお願いする。

■夜市

華陳さんの案内で MRT に乗って松山駅で降りる。台湾には日本統治時代に付けられた日本名の地名が残っており、松山もそのひとつで何となく親近感を感じる。

辺りは既に暗くなっているが、春節（旧正月、今年は 2 月 10 日）が終わったばかりなので街はイルミネーションで綺麗に輝いている。一際明るく輝いている「慈祐寺」の前からの「饒河街観光夜市」が始まる。華陳さんはこの夜市は 600m も続いていると言っている。

1 人の青年が私たちの目の前に現れる。何と彼は華陳さんの息子さんで、ヨコさんとは顔馴染みらしく言葉を交わしている。彼は仕事で日本語を使っているというので流暢な日本語を話す。

私は華陳さん親子揃っての温かいもてなしに何だか嬉しくなってくる。

夜市は揚げ物や焼き物、フルーツなどの食べ物が多いが基本何でも売っている。人も多く活気に溢れている。息子さんは「今日は平日なのでこれでも人出は少ない方です」と言っている。

「この店の胡椒餅が人気です」と華陳さんが教えてくれる。胡椒餅はかなり大きいので 10 人で 5 個注文する。胡椒餅はピリッと辛くて美味い、そしてボリュームたっぷりだ。これから始まる台湾の旅は料理の分量が問題になりそうな気がしてくる。

ヒデさんが勘定を全員分支払おうとすると華陳さんが先に支払ってしまった。今回の旅では共通の財布を用意して食事などはそこから出すようにしており、その財布をヒデさんが持っている。しかしその財布ではなく華陳さんの財布では申し訳ない限りだ。

そしてまた全員による 3 か国語のお礼になるが、ここでは「謝謝」が多数派だ。

【慈祐寺】

【饒河街観光夜市】

他にもいくつか買い食いをしたが、立ち食いも疲れたので食堂に入る。ほぼ満席の店内だが、華陳さん親子が手際よく、いや無理矢理に全員の席を確保してくれる。

骨付羊肉の煮込み、オイスターオムレツ、臭豆腐、少なめに料理を注文する。

ヨコさんがビールを買ってくると言って店を出る。そういえばメニューに飲み物がない。このような店では飲み物は店外で買って持ち込むのが台湾スタイルだと華陳さんが説明してくれる。

料理を待っている間にネーちゃんとミッちゃんがいつの間にか国際交流をして、隣に座っているフランス人と仲良くなっている。彼女たちの魅力、Japanese jyukujyo power か。

料理が出てくると臭いがきつい、特に臭豆腐は強烈だ。私も含め遠征隊メンバーの大半はこの臭いになかなかついて行けない。それでもフランス人も平然と食べていた。

夜市も街も MRT の車内も、若者が多く活気があって、バブル期の日本を思い出す。ジュリアナ東京ならぬジュリアナ台北がありそうな気がしてくる。

■平渓線の青桐駅

翌朝、9 人乗りの観光タクシーが迎えにきている。このタクシーは日本語が通じるという条件でヒデさんが日本から予約していた。運転手の年齢はアラフォー（40 才前後）か、誠実そうな男で流暢な日本語を話す。

ローカル鉄道の平渓線の青桐駅にやって来る。提灯が飾られてお祭りのような雰囲気だが、おそらく春節の飾りつけの名残だろう。

ここから「十分」まで列車に乗るので、観光タクシーとは十分駅で待ち合わせをする。レンタカーは戻らないといけないが、観光タクシーではこれができるからありがたい。

【青桐駅前　左に列車が見える】

線路は単線で電化されていない。線路幅は日本の JR 在来線と同じ 1067mm の狭軌を採用している。日本統治時代に整備したので日本と同じ規格になっている。

■十分

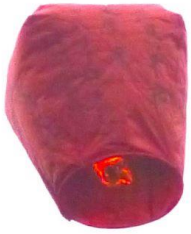
列車に乗って、ローカル鉄道の旅を楽しむ。いや熟年台湾遠征隊なので“ロートル鉄道”の旅と言った方が良いだろう。車内では様々な話で盛り上がっているが、誰も車窓からの景色を見ていないのが面白い。

十分まで 5.5km、4 駅しかないので間もなく到着し、運転手と合流する。

この駅の名物は何と言ってもランタン飛ばしで、多くの観光客が線路の両側にある土産物屋でランタンを買って飛ばしている。私たちもそれに加わるべくランタン 1 個を買う。

ランタンは紙で出来ており、サイズは 1m 四方くらい、4 面に筆と墨でメンバー全員が各々の願い事を書き入れる。書き終えると店の人がランタンの下の部分に油紙を付けて、それに火を点けてくれる。熱気球と同じ原理で、中の空気が温まるまで皆で手を添えて、一斉に手を離すとランランは空高く舞い上がって行く。

願い事が天に届くようで晴れ晴れとした気分になる。



【ランタン飛ばしの様子】

運転手の話では 1 日に 8000 個くらいのランタンが飛ばされているという。ランタンは油紙だけが燃えてあとは落下するので、そのまま放置しておくと街中がランタンの残骸だらけになってしまう。

そこで行政がとった施策は、残骸を買い取って再利用するというもので、観光とゴミ対策と雇用という循環システムを確立させている。

土産物店ではランタン 1 個を 200 元で売っており、残骸を回収所に持って行けば 1 個 120 元で買い取ってくれる。これに新品再生してその再生費用を上乗せして土産物店に卸している。

仮に残骸を 20 個拾えば 2400 元、日本円で 12000 円の日銭が入ることになり、いい小遣い稼ぎになる。

ここで台湾元と日本円の交換レートについて書いておこう。空港で両替した時のレートは、概ね日本円 5 に対して台湾元 1、つまり台湾元に 5 を掛けるとほぼ日本円に換算される。

■九分

日本でも有名な台湾の観光地「九分」にやって来る。宮崎駿のアニメ映画「千と千尋の神隠し」のモデルになった街と言われている。確かに提灯がたくさん飾ってある街並みはあの映画のシーンによく似ている。しかし映画の中の湯屋と赤い橋は群馬県四万温泉の積善館の方が似ている。まあ、それは宮崎駿が明らかにしていないので私の個人的意見に過ぎないが、両方訪れると納得するだろう。

天気が崩れて雨になってきた。それでもせっかく来たので九分の老街を散策する。老街とは旧市街のことで、狭くて古い街並みで多くの店が軒を連ねている。

雨なので運転手が雨具（カッパ）と傘を出してきて、「狭い路地だからカッパが良いでしょう」と言ってカッパを手渡してくれる。もちろん無料で、これには全員が感激する。そして 3 カ国のお礼の言葉が飛び交う。

【九分の老街の一角】

■昼食

昼食の場所について私たちは「地元の人が入るような店で、メニューが豊富な店で食べたい」と運転手にお願いして、九分から車で 10 分ほど走って「瑞芳美食広場」でやって来る。ここは地元の人が利用するフードコートで、大きな建物の中に 20 軒くらいの飲食店が入っている。

些細なことだが、フードコートを美食広場と訳している。いや逆で美食広場をフードコートと訳したのかも知れない。日本ならば「食の広場」としか言わないだろうが、そこに“美”を付いて美食としているのが食へのこだわりを感じる。

ちょうど昼食時なので地元の人たちが食事をしていて活気溢れている。ここでもビールを外のセブンイレブンで買って持ちこみ、牛肉麺や水餃子などを注文する。

味はなかなか美味いが、油や臭いはそれなりにきつい。キキちゃんは「1 週間もいれば慣れるわよ」と言っている。

【瑞芳美食広場の入口と内部】

■基隆（キールン）

港街「基隆」の高台にある「中正公園」にやって来る。中華民国の初代総統の蒋介石は台湾では蒋中正と呼ばれているから、中正が付く場所は蒋介石に関連する施設になる。

公園内には高さ 22.5m の白い観音像があり、その内部に入って窓から外を見る。晴れていれば眼下に基隆の街を一望できるはずだが、残念ながら本日は雨と霧でそれは叶わない。

基隆には大きな港があるのでクルーズで台湾に寄港する時は必ずこの基隆港になる。そのため私を含め遠征隊の隊員の多くは基隆には何度も来ている。

■奇岩の宝庫、地質公園

基隆から少し北上して「野柳地質公園」にやって来る。奇岩の宝庫とでもいうべき公園で台湾のカッパドキアと言われている。さすがにカッパドキアは誇張し過ぎだが、様々な奇岩があり日本では類を見ない景勝地だろう。

奇岩の中でも最も有名なのが女王頭岩（クイーンヘッド）で、その岩の前に多くの観光客が集まって写真撮影の順番待ちの長い列ができている。私たちはそれに並ぶ根性もなく遠くから撮影する。確かに見方によってはクレオパトラなどの女王に見えないこともない。

【野柳地質公園のクイーンヘッド】

■最北端

台湾最北端の「富貴角」にやって来る。日本でも台湾でも最北端や最南端には特別な思い入れがあるもので、ある種の達成感を得ることができる。

突端には灯台もあるが、灯台まで少し距離があるようで、雨も降っているから看板前で記念撮影する。この 1 枚の写真が台湾最北端に行った証拠になると、女性陣は喜んでいる。

【台湾最北端の富貴角公園】

■淡水

最北端を回り、台湾海峡に面する港街「淡水」で観光タクシーを降りる。いや降りようとした直前に運転手から「今日の料金まだもらっていません・・・」と料金を請求される。ヒデさんが慌てて 7100 元を支払う。

淡水の老街もまだ春節の飾りつけが残っている。地元の人が食べている小奇麗な食堂に入る。そして台湾に来て今まで食べていない鍋料理を注文する。ビールはもちろんセブンイレブンで買い込んで、いつものように乾杯して夕食が始まる。

チーズクリーミー鍋と玉子麺入り辛味鍋を注文したが、玉子麺入り鍋には、インスタントラーメンの乾麺が 1 個丸ごと入っている。ミッちゃんが「大胆な店ね」と感心している。

【食事をした麻辣食堂】

【チーズクリーミー鍋】

【玉子麺入り辛味鍋】

辛味鍋にはインスタント麺が、チーズクリーミー鍋には山盛りのご飯が付いている。2 つずつ頼んだので 4 つの鍋を 8 人でつつくことになるが、それでも食べきれない。こんな時頼りになるのは山男のヨシさんで、女性陣が「あとはお願い」と言ってバトンタッチする。

そんな中、ヒデさんがスマホをいじり電話もしている。彼は酒飲みでも“真っ当な酒飲み”なので乾杯の後にスマホをいじるような流儀外れなことを普段はしないが、どうもトラブルらしい。それもかなり焦っている。

理由を聞くと、観光タクシーの代金は日本で既に支払い済みのはずなのに、なぜ料金を請求されたのか腑に落ちないので調べていると言っている。

しばらくして全容が判明する。料金は既に日本のエージェントに支払い済みで、台湾のエージェントにはその情報が届いていたが、その先の観光タクシーの運転手には伝わっていなかった。そのため運転手はあのまま別れると料金をもらい損ねると思って慌てて請求したようだ。そういえば請求書も領収書もなかった。

そして支払った 7100 元は本日中にホテルのフロントに届くことになった。

しかしこのことによって私たちは 10400 元支払ったが、観光タクシーの運転手には 7100 元しか入らないことが判明する。つまり 3300 元、約 3 割が中間搾取されていることになる。

中間搾取という言い方には悪意があるが、手数料だから当たり前で、むしろ 2 社入っているのに 3 割は意外に安いかもしれない。

問題も解決し再び乾杯して、“真っ当な酒飲み”は晴れてビールを飲み干す。その顔は安堵の表情で満ち溢れている。誰からともなく「お疲れさま」と声がかかる。

このような二重払いの再発防止はどうしたら良いのだろうか。
やはり最初に料金を確認すべきだった。実は便宜を図ってもらえるようにタクシーに乗って直ぐに運転手にチップ 500 元を渡しており、その時が好機だった。
あるいは現金を渡す時は領収書をもらうようにすれば一時的に支払っても二重払いは防げる。

店を出て、港街の海の香りが漂う夜風にあたりながら MRT の駅に向かいホテルに戻る。

■台北を散策
旅の 3 日目、MRT に乗って台北市内観光に出掛ける。台湾最古の寺院「龍山寺」をはじめ、「総統府」、「介寿公園」、「中正記念堂」など台北中心部を巡る。日本人や外国人観光客が非常に多い。

【中正記念堂から撮った正面広場】

「台北 101 タワー」は高さ 508m、地上 101 階のビルで台湾では縁起が良いとされている竹を模したデザインになっている。さらに台湾では数字の八が末広がりで縁起が良いので、このタワーには竹の節が 8 つある。
展望台に登ろうかと思ったが、ビルの上の方は雲に隠れているので、登るのを諦めて地下のフードコート、いや美食広場で昼食を食べる。
ここは広くてたくさんの店が入っている。日本の一風堂やモスバーガーもあって修学旅行らしい台湾の中高生が多く利用している。そういえば華陳さんが台湾では日本のスシローや丸亀製麺など、価格は高いが人気があると言っていたことを思い出す。

■烏来温泉に泊まる
午後から MRT で新店駅へ、そこからバスに乗り換えて「烏来温泉」に向かう。ローカルバスなので地元の人たちが多く乗っており車内はかなり混雑している。テレビ番組のバス旅のように地元の乗客とのコミュニケーションを図りたいが、カーブが多い坂道で立っているだけでも大変でそんな余裕はない。

約 30 分のローカルバスの旅を終えて烏来温泉に到着する。今宵泊まる宿は温泉街の外れにあって、カジュアルな感じのホテルで落ち着けそうだ。

部屋は 2 部屋とってあり、男性陣はその 1 室に入る。布団が敷いてあるが、その布団はダブルサイズで 2 つしかない。つまり 4 人で 2 つの布団で寝ることになる。女性陣の部屋も同じだ。

さらに驚いたことは寝室の隣には大きな浴槽のあるバスルームがあり、バスルームと寝室の間は大きなガラス窓があって目隠し扉が付いており、その扉を開ければバスルームが丸見えになる。この構造は明らかにラブホテルだ。

【宿「烏來温泉山荘」の外観】

【敷かれていた布団】

しかし敷布団をよく見ると、シングルサイズの敷布団を大きなシーツで包んでダブルサイズの敷布団にしている。つまり敷布団は 4 つある。掛布団も 4 つあるから、敷き布団を分けてシーツを追加すれば普通にシングルサイズの布団になる。早速フロントにお願いして分けてもらう。

予約したヒデさんは、「台湾の宿はほとんどがダブルベッドで、それでもこの宿はシングル 4 つということで 2 部屋予約したが・・・」と申し訳なさそうに言っている。

もちろん誰も彼を責めることもなく、むしろ女性陣からは「布団をそのままにして部屋と布団の割り当てを全員参加の阿弥陀クジで決めれば良かった」などと大胆な発言が聞こえてくる。これには男性陣は震えあがっていた。

■烏来温泉で食べる

夕食を食べに近くの食堂に行く。入口で看板娘が店内に招き入れてくれる。看板娘は 90 才、片言で日本語が話せる。

大きな中華テーブルに案内される。しかし注文を聞きにきたのは看板娘ではなく、中国語しか話せない店員だ。スマホの翻訳機能を使うが、なかなか上手く伝わらない。

台湾に来てから何回か料理を頼んでいるが、店によって 1 皿の分量がまちまちで 1 人前の時もあれば、2～3 人前の時もある。結局、いくつかの料理を少なめに頼む。

出てきた炒飯は 1 人前頼んだはずだが、山盛りで 3 人前はある。山豚と書かれた肉はイノシシの肉と思ったが、この辺りの山間地の農家で育った豚の肉らしい。確かに山の豚だ。北京ダックと説明してくれた鶏肉も何か怪しい。

それでも味はいい。特に川魚の料理は比較的さっぱりしていて揚げ物や濃い味に飽きてきた頃なのでありがたい。

【北京ダック（？）】

【川魚の料理】

■烏来温泉に入る

宿に戻り入浴する。と言ってもラブホテル風の部屋風呂ではなく、男女別の大浴場に入る。

温度の異なるいくつかの浴槽があって、サウナも水風呂もある。渓流沿いのベランダには簡易ベッドが並んでいる。

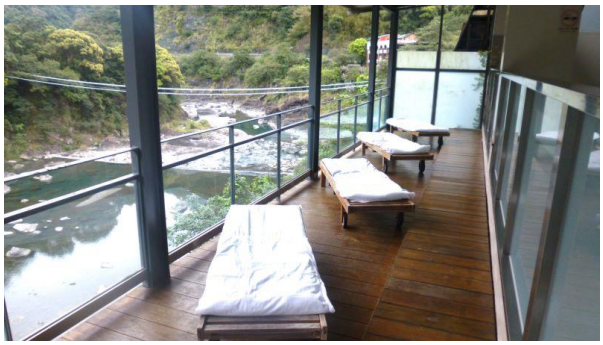
ちょうど良い温度の浴槽には地元のおじさんが入っており、私もその浴槽に入る。私たちが日本人と分かったらしく彼の方から私に日本語で話しかけてきた。

彼は台北に住んでいて毎週この温泉に日帰入浴に来ると言っている。ここの温泉の泉質も設備も最高だと話している。私にしてみれば泉質はおそらく単純泉で、設備も日本のスーパー銭湯並みで特別な感激はない。もしもこのおじさんが日本の温泉旅館に泊まれば感動してリピータとして何度も日本に来ることになるだろう。

同じ浴槽にもう 1 人若者がいる。見た目は台湾の若者で日本語が分からないので、台湾おじさんが中国語で通訳してくれる。そして分かったことは、彼はアメリカ在住の 25 才、台湾出身の両親と里帰り中だという。ここから日本語と中国語と英語の三つ巴の世間話で盛り上がる。

ヨコさんも参戦し、温泉に浸かりながら地元の人とのコミュニケーションが始まる。テレビの旅番組のシーンを彷彿させる。

【温度の違う浴槽の大浴場】



【渓流を眺める簡易ベッド】

短時間だが、観光情報から政治問題まで会話は多岐に渡り、瞬く間に時間が過ぎてしまった。残念なことに若者の両親がアメリカに渡った理由までは聞けなかった。

勝手に想像すると、やはり中国の脅威で、その危機感を感じて渡米したのだろう。1997 年にイギリスから中国へ香港が返還されたが、返還以前の 1980 年代頃から香港を脱出して外国に移住する人たちが多くなっていったことを思い出した。

■烏来の温泉街

シングルになった布団でぐっすり眠って、翌日は烏来の温泉街を歩く。烏来は渓流沿いにある温泉地で、温泉街は古い老街になっている。有名な観光地なので観光客も多い。

しかしちょっと奥まった路地には閉じたままの店や廃屋も目に留まる。それは日本でもよく見かけるもので、かつて隆盛を誇った大規模温泉街が今は勢いを失って、古い建物がむなしく建っているというあの光景を思い出す。

【烏来の温泉街】

■トロッコ列車

温泉街の奥にトロッコ列車の駅がある。トロッコ列車は約 1.5km を走る観光列車で、4 人掛の小さな車両が 4 両連結されていて先頭の機関車には専属の運転手が座っている。

トロッコ列車に乗る。熟年隊員たちは子供のようにはしゃいでいる。走り出すと線路が狭く老朽化しているので乗り心地は良くはない。

旅は老化防止効果があるとよく耳にするが、熟年隊員たちのこの様子を見れば充分に納得できる。童心に帰ってはしゃぐことがポジティブな影響を与えるからだろう。

このトロッコ列車は日本統治時代に敷設され、木材の運搬と観光客の送迎を兼ねていたが、現在は観光専用になっている。遊園地や木材運搬専用のトロッコ列車は単線だが、ここは木材運搬兼観光路線だったので複線になっていて上り下りの列車が時々すれ違う。このすれ違いを見ることができるトロッコ列車は珍しい。

終点駅に着くと土産物屋が何店舗かあって、桜の花が咲いている。そして目の前には高さ 80m の「烏来滝」が落ちている。台湾は山が多いから水も豊富で川も多い。当然のように滝もあるから、温泉に滝という日本の観光地に良く似ている。

帰りはトロッコ列車に乗らずに線路と並行している歩道を歩く。温泉街に近づくと河原で穴を掘って水を堰き止めた露天風呂が現れる。

ヨコさんは「これこれ」と言っている。実は彼の記憶の中にはこの露天風呂があったのだが、なかなか見つけられずにいたらしい。

欧米の観光客らしき人たちが水着を着て入浴している。日本では珍しくない光景だが、欧米人にとっては川が温泉になっていることも、そこに入るということも非日常なのだろう。

歩いている途中で、竹の中に米を入れて炊いたこの地方の名物「竹筒飯」を買い、これを主食に昼食にする。竹筒飯の中はもち米の炊き込みご飯で比較的あっさりしていて意外に美味い。

【烏来滝を背景に集合写真】

【上：トロッコ列車】　【下：河原の露天風呂】

第三章　台湾南部

■新幹線

台北から新幹線「台湾高速鉄道」に乗って南部最大の高雄市に行く。

台湾が九州と同じくらいなのでその距離 345km は北九州～鹿児島間とほぼ同じ、時間も同じくらいだ。

2 列 3 列の座席配置は日本の新幹線に乗っているような気分になる。ワゴン販売があって売り子が飲み物や弁当を売りに来るのも日本的だ。いや最近の日本の新幹線ではワゴン販売を廃止した列車も増えており、むしろ懐かしさを感じる。

【台湾高速鉄道の車内】

台湾高速鉄道は日本の新幹線の初の海外輸出になった。昔から日本の鉄道技術は優秀だったが国際競争力は全くなかった。その理由は日本の線路幅は国際標準の 1432mm より狭い 1067mm の狭軌を採用したためだ。この狭い軌道はアフリカなどの植民地用だからケープ軌道とも言われて、それゆえ日本三大失敗の一つと揶揄された。

しかし新幹線は国際標準の線路幅を採用したので、ようやく国際競争の舞台に上がることができるようになった。

台湾高速鉄道への売り込みで、日本はフランス・ドイツの欧州連合と競合した。それは単なる競合でなく、台湾国内の政財界をも二分して双方を推した。

ここで台湾の軍事面で足かせがあった。中国が反発するのでアメリカは台湾に戦闘機の売却を許可しない。そこで台湾はフランスから戦闘機を買うために欧州連合と契約した。

ところがアメリカが一転して戦闘機の売却を許可し、ドイツの高速鉄道では脱線事故で多数の死者が出た。そして 1999 年の台湾大地震で地震に弱いとされる欧州の鉄道が見直されて大逆転で日本になった。しかし欧州連合とは契約した後なので違約金を請求され、結果的には日欧混在システムになって 2007 年に開業した。

国際社会で台湾が置かれている微妙な立場が影を落とした。

■高雄の夜

高雄の街を歩きながらホテルを探していると、親切なおばさんが道を教えてくれる。

私たちは教えてもらった方向に歩き、おばさんが教えてくれた付近に来るが、目的のホテルがさらに先だと気が付く。すると先ほどのおばさんが追いかけて来て、中国語で「間違った宿を教えてしまった。本当はもっと向こうで・・・」と言っている。いや分からないがきっとそんなことを言っているはずだ。結構な距離を走ったようで彼女の息が上がっている。私たちは「大丈夫、わざわざありがとう」と日本語で伝えて右手の親指を立ててグーを出した。

私たちが日本人だからなのか、そこはよく分からないが、おばさんの親切に驚き申し訳なく思いながらもホテルに向かう。

ホテルにチェックインして荷物を置き、MRT で美麗島駅に行く。この駅構内の照明がとても綺麗で名物になっている。

そこから歩いて「六合観光夜市」に行く。ここは観光夜市ではないので地元の人が多い。

温暖な台湾でも北部から南部に来たのでさらに暖かい。そのためなのかミニスカートやホットパンツの若い女性が多いように感じられる。台湾の若者たちは開放的でエネルギッシュだ。台湾の活気を感じる。

夜市にも慣れてきて、店の前の露天に並んだテーブルに椅子を持ってきて各自好きな物を注文して食べる。私は海鮮粥を食べると、あっさりとしていて食べ易い。キキちゃんもチーちゃんも「北部よりも南部の方が口に合うね」と言っている。

夜市で酒の肴にネギ巻きや焼き鳥を買い、コンビニでビールを買ってホテルで宴会になる。ビールはもちろん台湾ビールで、ロング缶 4 本 80 元なので 1 本 45 元（約 225 円）は日本よりも少し安い。

【美麗島駅の構内】

【六合観光夜市】

■ホテルの朝

翌朝、私たちはホテルのロビーに集まっている。するとけたたましい爆竹の音が鳴り響き、高級乗用車 3 台がホテルの玄関に停まった。車は派手なリボンを掛けた装飾をしており、車から降りてきたのは若い男女、そしてその両親らしき人々は正装をしている。

スタッフに聞くと本日は台湾の祝日で、このホテルでも多くの結婚式があるという。

私たちは新婚カップルに「おめでとう」などとエールを送る。それに応えるように新婚カップルも手を振って中国語に何か言っている。朝からおめでたい国際親善が行われる。それにしてもミニスカート姿の花嫁は実にまぶしいかった。

私たちがロビーにいた理由は、国際親善やミニスカートを見るためではなく 1 人の女性と待ち合わせをしていたからで、その女性が現れる。

彼女はヨシさんが旅で知り合った高雄市在住のローラさん、私はその名前から欧米人の女性と思っていた。さらに金髪で若い美人だと勝手に想像していたが、ローラさんは普通の台湾人女性だった。ヨシさんはオッサンたちに少しの間でも夢を見させてあげようとしたのか、あるいは国際感覚豊かな彼にとってそれは普通のことだったのか。その真相は聞いていない。

■船に乗って

ローラさんの案内で、渡船に乗って「旗津半島」に渡る。彼女の説明では、この半島は横に長く 10km くらいあるので半島の付け根に運河を通して船が通行できるようにしたので、実態は島になっている。

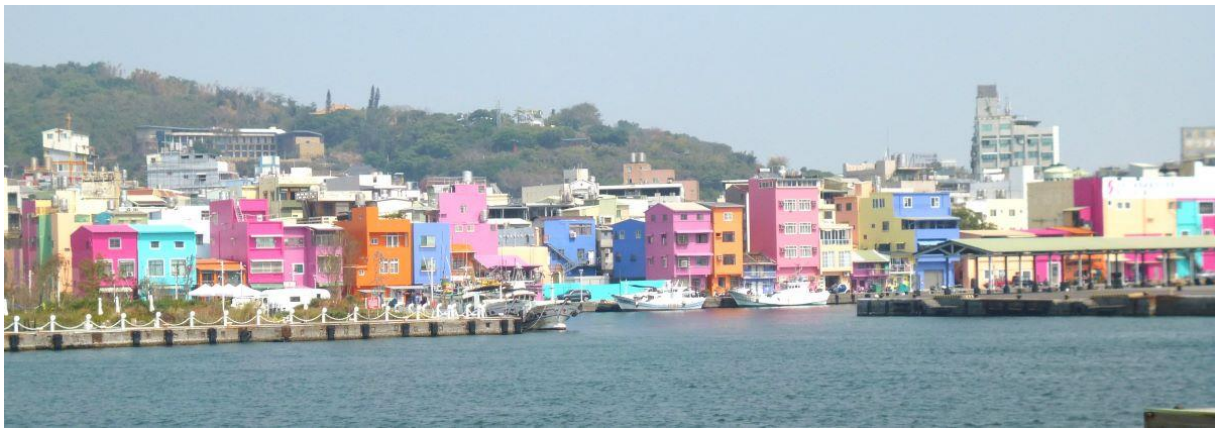
船は地元の人々が通勤通学に利用しているので、人間以外にオートバイや自転車も運べるが、午前 10 時過ぎなので通勤通学は終わり観光客が多い。

船に乗ること約 10 分、半島に上陸すると土産物屋やレンタサイクル屋がたくさんあり、面白い自転車が並んでいる。横に並んで 2 人で乗る 4 輪自転車、さらにその後ろに座席を増やした 4 人乗り、6 人乗りもある。

【面白い自転車】

自転車に乗りたい気持ちを抑えて、私たちは船着き場近くにある「高雄灯台」を目指して歩き始める。灯台は高台にあってそこからは台湾本島側が見える。対岸の港にはカラフルな建物がいくつも建っている。

それがまるでカリブ海のオランダ領キュラソー島のようだとネーちゃんが言っている。確かにキュラソーは原色のカラフルな建物が並んでいた。それにしてもこのメンバーと一緒に旅をすると、ここは〇〇の△△に似ているという話が多い。



【対岸のカラフルな建物群】

半島の西側つまり外海側にはビーチが広がっており、ちょっと雰囲気が違う。ハワイと呼ぶには無理があるが、南国風の木が立ち並び、面白いオブジェが立っている。

■哈瑪星（はません）

半島から戻り、船着き場近くの「哈瑪星台湾鉄道館」にやってくる。鉄道博物館ということだが、レトロな波止場跡には線路が敷かれた広場があり斬新で大きなオブジェがいくつか置かれている。その奥の倉庫群は横浜の赤レンガ倉庫街のようだ。

【哈瑪星台湾鉄道館の広場のオブジェ】

日本統治時代、この地区は港で発展し、海岸沿いには鉄道が走っていて“浜線（はません）”と呼ばれていた。今もその名残で哈瑪星（はません）と当て字が使われている。

このような場合は日本語ではカタカナを使うが、中国語は全て漢字なので分かり難い。

公園内には次世代路面電車 LRT が走っている。公園内から市街地にも延びている便利な乗り物で、本日は台湾の祝日で無料だという。無料と聞いて乗り込むと車内は超満員、過酷な通勤電車を考えれば乗れないこともないが、車内から中国語で叫び声が聞こえる。ローラさんが日本語で「赤ちゃんがいるので押さないで！と言っています」と言い、ローラさんと数人が降りた。

もしもローラさんが教えてくれなかったら、あの叫び声は「押すな！コノヤロー！」としか私には聞こえなかった。

私たちが次の駅で降りて待っていると、ローラさんたちが歩いてくる。満員電車よりも快適そうで、タダほど高いものはないことを痛感する。

LRT は高雄湾沿いに高層ビルの林立する一帯に向かって伸びており、都会の港を感じさせてくれる。

【哈瑪星のから広がる高雄港とその沿岸　左手前に LRT の線路がある】

■フードコートで昼食

近くのスーパーで昼食のパンやビールを買い込み、フードコートで昼食にする。フードコートつまり美食広場の名にふさわしい美食がテーブルに並ぶ。

それはローラさんが差し入れをしてくれた果物の「ナツメ」で、見た目は青いリンゴのようだが、食べてみるとナシに近い。みずみずしさがナシのようだが、完全にナシの味ではなく独特な甘味があって、むしろナシよりも美味しく感じられる。見た目と味のギャップが私にとっては初体験で、ナシ好きの私にとっては実にありがたい美食の果物だ。

ナツメは日本では手に入らない果物で、台湾では今が旬だとローラさんが教えてくれる。それを聞いたチーちゃんが「だから私たちが知らないのね、やっぱり台湾はフルーツの宝庫よね」言っている。

調べてみると、台湾で赤いナツメは漢方薬に使われドライフルーツにもなる。それ対してローラさんが持って来てくれた青いナツメは生ナツメと呼ばれ、元々はインドで栽培されていたが、皮が厚く味が渋く実も小さかったので、台湾で 30 年間かけて品種改良した。

産地は台湾南部の高雄や台南に集中しており、12 月～2 月が収穫時期なので、ちょうど今が旬の最後の時期になる。

【ナツメ】

たまたま私の前の席にローラさんが座ったので、私は軽い気持ちで彼女にいくつかの質問をする。

台湾の言葉で中国本土の人と話が通じるのかと質問すると、彼女は「今私が話している言葉は北京語と同じです。元々台湾には現地人が使っていた現地語がありましたが、蒋介石が北京から来たので北京語が広まりました」と話してくれる。そして彼女は「元々の現地語は全く分かりません、ついでに広東語や香港語も全く分かりません」と言っている。

彼女は現在、日本語を勉強中で、もう少し上達したら日本に長期滞在旅行に行きたいと話してくれる。

ついでに日本の印象を聞くと、少し考えて「日本人は時間に正確、いや時間に厳しいですね」と答える。その“厳しい”という言葉が私の脳裏に何故か焼き付く。

言われてみれば、世界広しといえど日本人ほど時間に厳格な国民はいない気がする。

■左営蓮池潭

明日帰国する熟年台湾遠征隊の女性隊員 4 人は本日中に台北まで移動する必要があり、新幹線の左営駅まで彼女たちを送る。ここからは男 4 人の気楽な旅になる。それでも本日は夜までローラさんも一緒で、お願いしたいことがたくさんある。

左営駅の近くに「左営蓮池潭」という湖がある。たくさんの寺院や廟が集まっている。湖の中ほどに島があり、島に渡る橋を歩いて行くと大きな「北極玄天上帝神像」と対面する。神像は蛇と亀を足元に配して、剣を持っている。神像の中に拝殿所で手を合わせる。願い事は明日から始まる熟年台湾遠征隊オッサン 4 人旅の安全祈願だ。

【左営蓮池潭の北極玄天上帝神像】

■レンタカーを借りる

安全祈願をして、私たちは明日借りるレンタカー店に向かう。レンタカーの借り方で不安な部分があり中国語が分かるローラさんが一緒にいる今日中に不安を解消したく同行してもらう。

レンタカー店に入り予約表を提示すると、予約は明日からになっているがスタッフが揃っている本日手続きをして欲しいと言われる。もちろんローラさんが通訳してくれる。

まずは運転する人全員のパスポートを提示する。台湾では国際運転免許証は使えないから、日本の運転免許証と日本台湾交流協会が発行する日本の運転免許証の中国語訳を提示する。

そして予想していない様々なことを言われる。

保険は日本で調べていた保険料よりも高い。その理由は日本ではレンタカー1 台について保険料を支払うが、台湾では運転手 1 人について支払う。それは私たちが日本人つまり外国人だからなのか分からないが、人数分の保険料を支払う。

駐車違反やスピード違反の罰金は車の所有者が支払うという。つまり警察からレンタカー会社に請求がくるのでクレジットカードの登録を要求される。ETC の高速道路代も同様でレンタカー会社に請求がくるからクレジットカードになる。

ガソリンは 95 を入れろと言われる。私たちは何のことかさっぱり分からず、その意味を聞くと、台湾のガソリンは 98、95、92 と 3 等級あって、数字はガソリンの性能を示すオクタン価のことになる。日本ではハイオクガソリンのオクタン価は 98、それ以下がレギュラーガソリンだが、台湾ではレギュラーガソリンが 95、92 と 2 等級に分かれている。その 2 等級でも性能の良い 95 を入れろということになる。

その他にもいろいろ言われて、結局 1 時間半くらいかかった。もしもローラさんがいなかったら借りるのに半日はかかっていただろう。

レンタカー6 日間の総費用は約 10 万円で、人数分の保険で高くはなったが、概ね日本の 2 倍くらいだろう。さらにこれにガソリン代や高速道路代が加わることになる。

「これなら観光タクシーをチャーターする手もあるね」と誰かが言っている。確かにリスクと手間を考えればそれもある。観光タクシーは 8 人で 1 日約 5 万円、単純計算して 4 人で 6 日間では約 15 万円になる。中間搾取の 3 割もあるから直接交渉すればいい勝負になる。

それでも台湾でレンタカー借りて旅をする意義は充分にあり、熟年台湾遠征隊の隊員たちはワクワクしてくる。

■レストランにて

ローラさんへのお礼を兼ねてホテル近くのレストランに行く。この店は彼女お勧めで地元の人々にも人気の小籠包が美味い店だという。

持ち込んだビールで乾杯し、小籠包を注文する。台湾名物のパイナップルチャーハンがあり、今パイナップルは旬でないとローラさんは言うが、台湾でないと味わえないから注文する。

小籠包はもちろん美味い。パイナップルチャーハンは薄味のチャーハンにやや甘いパイナップルでこちらもなかなかいける。これは旬の時季に食べたくなる。

【パイナップルチャーハン】

女性陣から LINE が入る。華陳さんから教えてもらった店で美味しく小籠包を食べている写真も送られてきた。テーブルには台湾ビールがたくさん写っている。女性陣も持ち込んだのだろう。

すっかり台湾に慣れたようだが、海外旅行は慣れた頃に帰国になる。だからまた来たくなる。実に良く出来ている。

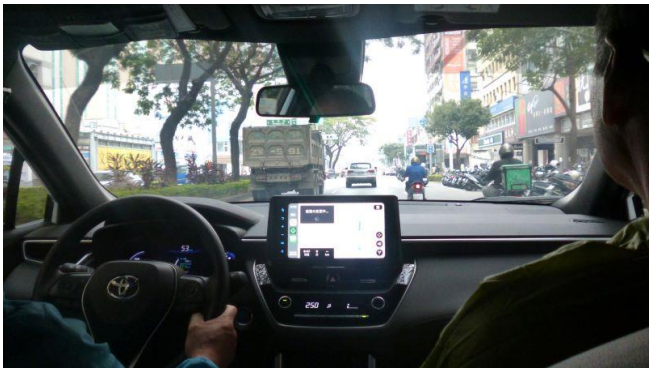
それにしても昨今の SNS の力は凄い。ちょっと前に華陳さんが店の紹介の LINE を入れてくれて、今はその店からリアルタイムで状況が伝わってくる。

これも Wi-Fi ルータを男女別に 2 台借りてきたからで、改めてその威力を思い知る。

今やスマホは旅の必需品になっており、連絡だけでなく翻訳も地図も見られる。もはやガイドブックや地図を持ち歩く必要がない。それだけでなく Google の地図は常に最新なので地図が古くて失敗することもない。その昔、私は地図が古くて失敗したことを思い出した。

■レンタカーに乗る

翌朝、レンタカーを取りに行く。まずはヒデさんが運転する。発車してなぜかワイパーが動く。これは左ハンドルの車はウインカーとワイパーのレバーが右ハンドルの車とは逆なので必ず犯すミスで、まあ挨拶代わりだ。



【高雄内を走るレンタカーからの風景】

高雄市は人口約 270 万人の大都市で、ちょうど大阪市くらいの規模になる。北の台北市に対する南のライバルで、東京に対する大阪の位置づけにも似ている。

ここでもオートバイが多い。それが日本と決定的に違う点で、かなり気を使わないといけない。オートバイに注意しながら、私たちは台湾の最南端を目指す。

■オービス（速度違反自動締装置）

注意するのはオートバイだけではない。台湾北部を観光タクシーで巡った時に運転手が言っていたことを思い出す。

台湾はスピード違反に対して厳しく、オービスが多く設置されている。それが実にいやらしくて、例えばトンネル内では時速 50km の制限が、出口付近で急に 40km に変更されている。運転手は目の前が晴れるとついついスピードを出すのでトンネル出口のオービスで捕まることが多いと教えてくれた。

実際に観光タクシーに乗っていてそんな場所がいくつもあった。だから運転手は自分の運転は安全運転で安心してくれと言いたかったのだろう。

その時に私たちが高雄でレンタカーを借りて山間部などを走ると伝えたが、彼はしばらく絶句して、ただ「頑張って下さい」と言っていたのを思い出した。

そんなことを思い出しての運転は、どうしても慎重になる。そのために運転手と助手席のナビゲータ以外に速度表示を見る専門の役割が後部座席の人に割り振られる。

■最南端

最南端の「ガランビ公園」にやって来る。駐車場で本日は灯台に入れないがそれでもいいかと身振り手振りで聞かれる。問題ないと身振り手振りで伝える。入場料を支払い公園内に入ると芝生が広がっていて、灯台がある。あれが本日は入れない灯台らしい。

展望台に登ると右に台湾海峡、左に太平洋、正面はバシー海峡だと看板に書かれている。海峡とは陸地と陸地の間の海を指すものなので、台湾海峡の向こうは中国の大陸だが、バシー海峡の向こうにある陸地は何処なのだろうか。

スマホの地図で調べるとフィリピンがある。フィリピンとは遠いところだと思っていたが、それがこの海の対岸にあるとは驚いてしまう。

【最南端のガランビ公園】

駐車場の脇にある薄汚れた感じの食堂街の食堂に入る。慣れてきたので炒飯、炒麺、鍋焼麺を注文する。炒飯はチャーハン、炒麺は焼きそば、鍋焼麺は小さな釜に入っているうどんのことで、日本の鍋焼きうどんとは違う。なかなか良い味で、軽い気持ちで入った食堂で満足できる昼食に出会えて得をした気分になる。

台湾の南部は北部に比べて味があっさりしていて、香辛料も抑えてある。疲れてきた私の胃袋にはありがたい。

【食堂　手前の椅子とテーブルで食べた】

【鍋焼麺】

■南部の海岸を走る。

昼食後は私がレンタカーを運転する。駐車場から出る処でウインカーを出したつもりなのにワイパーが動く。あれだけ注意していたが、やってしまった。「お決まりの名刺代わりの挨拶のようなものだよ」とヨシさんに言われる。

最南端までは台湾の西側の台湾海峡側を走ってきたが、これからは東側つまり太平洋側を北上する。

海岸線には綺麗な景色が広がる。東側は断崖絶壁なところが多いとヨコさんが言っていたが、まだ最南端に近いのでそうでもない。

【最南端から約 10km 北方の東海岸の風景】

狭いカーブで対向車が来ると、日本では少しスピードを落とし譲り合いをするが、台湾では突っ込んでくる。そういえば観光タクシーの運転手が「台湾の運転は譲り合いではなく、突っ込んだもの勝ち」と言っていたが、それを実感する。

ヨシさんに運転を交代する。すると案の定、すぐにワイパーが動く。私は「名刺ですよね」と言って彼を慰めたつもりが、それどころではないらしくパニックっている。

■知本温泉

台湾南部の「知本温泉」にやって来る。この温泉も日本統治時代に開発された温泉ということで知本という日本名がついている。温泉街は烏来温泉よりも広範囲で近代的な感じがする。

今夜のホテルは大きなリゾートホテルで、玄関の近くに源泉の吹き出し口があって 103℃と書かれている。高温の源泉を利用して温泉玉子を作っている。

温泉地なので部屋はまたダブルベッドかと一抹の不安がよぎるが、普通のツインルームが 2 部屋で、清潔感もあって心地よい。

【ホテルから見た知本温泉街　左に源泉吹き出し口】

日本の温泉地のホテルや旅館は１泊２食付きが主流だが、台湾含め世界的には１泊朝食付きのB&B（Bed＆Breakfast）が一般的になっている。もっとも最近は日本でも宿泊と食事を分離する“泊食分離”を観光庁が推進している。夕食の提供は宿にとって負担が大きく、人出不足で手が回らないことや、グルメ志向・アレルギー対応なども観光立国には欠かせない。

日本の温泉地特有なものとして浴衣がある。外国でもバスローブのような室内着を用意しているホテルもあるが、それを着て部屋の外には出ない。

私は温泉旅館の浴衣が大好きで、それは日本の温泉文化の象徴だと思っている。入浴に際して脱ぎやすく着やすい、飲食で汚すこともいとわず、そのまま寝ることもできる。何よりも浴衣に着替えることでリラックスできる。単なる衣服を超えて機能的かつ神聖なものなので温泉地のユニフォーム、正装と言っても過言ではない。日本統治時代に浴衣文化を伝え、残せなかったことが悔やまれる。

■夕食

夕食を食べに出掛ける。もちろん浴衣は着ていない。いくつか並んだ温泉ホテルやレストランを過ぎたところに地元の人が食べる小さな食堂が数軒ある。

綺麗とは言い難い店の前で「ここがいいね」とヨコさんが言いながら中に入る。テーブルに着くと店の女将が注文の紙を持ってくる。その紙は店の料理一覧表になっていて価格も書かれている。個数欄に数字を書きこむことで注文できる。

【夕食を食べた地元の食堂】

ヒデさんが隣のテーブルの地元の中年夫婦が食べている料理を指差して、女将に「あれと同じものを」と日本語で言って注文する。中年夫婦もこちらの作戦を理解したようで「これも美味いよ」と思われる言葉を中国語で言いながら、料理と一覧表の位置を指差してくれる。

さらに空心菜と豚肉の炒め物が写真付きで壁に貼ってあり、私が身振り手振りと日本語で豚肉の代わりに牛肉にして欲しいと交渉して、これも何とか注文できる。

ややこしい会話ではないので翻訳機も使わずに、日本語と身振り手振りだけで完結するのだから面白い。

ビール 4 本含め 4 人分で 1100 元（約 5500 円）、満腹感・満足感たっぷりの夕食になる。

満足な夕食をして 2 時間も経っただろうか、すっかり暗くなっている。

帰りは温泉街の至る所でイルミネーションが綺麗に輝いている。ホテルに戻っても夜間照明で建物が浮き上がって見える。

【温泉街のイルミネーション】

【ホテルの夜間照明】

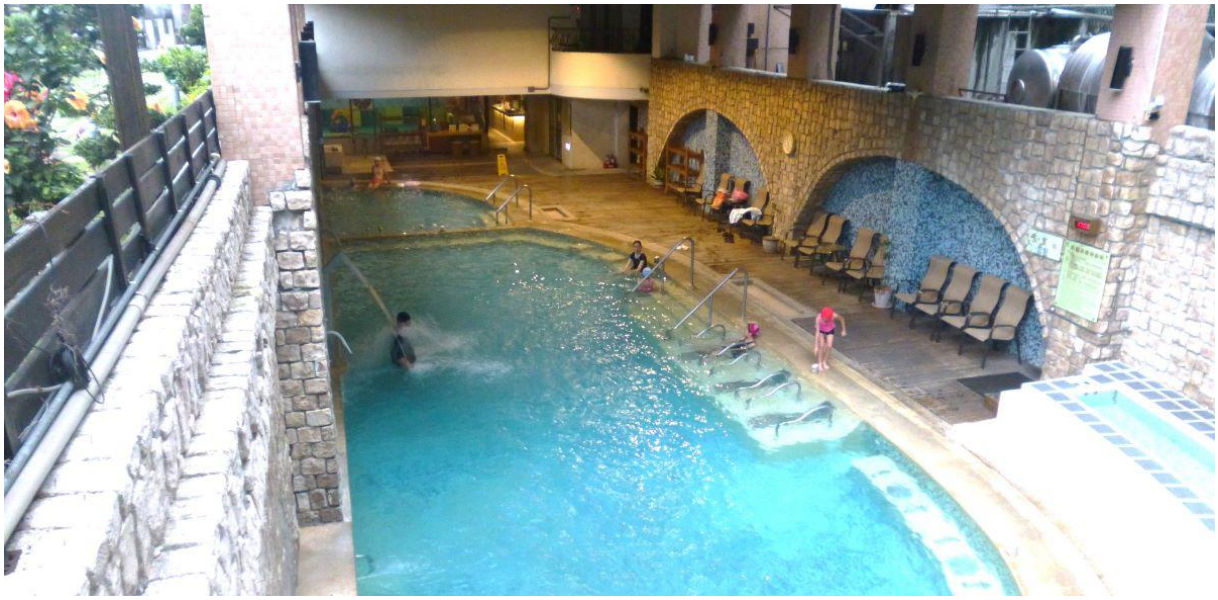
■温泉に浸かる

ホテルには大浴場がある。ただし烏来温泉で泊まったホテルのように男女別で裸で入る大浴場ではなく、水着を着て入る混浴大浴場になっている。外国人それも中国人は同性の家族でもあまり裸を見せないというから、これが一般的な台湾のホテルの入浴スタイルなのだろう。

大浴場の壁には酸性･アルカリ性の度合いを示す水素イオン濃度 pH が 8.1 と表示されている。pH 7.0 が中性なので、この温泉はアルカリ泉でかなりヌルヌルしている。

温度の違う大きな浴槽が 2 つと子供用の浅い浴槽があり、打たせ湯やサウナもある。

私たちが入っていると、オバサン 4 人、若いカップルも入って来るが、烏来温泉にように話をすることはなかった。



【ホテルの大浴場】

第四章　台湾東部

■池上弁当

知本温泉から北に向かって走り、池上駅前の弁当屋「池上弁当原創老店」で弁当を購入する。池上弁当は台湾で一番有名な弁当だとヨコさんが自慢そうに言っている。

私は、弁当は日本だけのものかと思っていたので台湾にもあったことに少し驚くが、調べてみると 1939 年頃からブランド米の産地の池上駅付近で弁当販売が始まったとのことで、それは日本統治時代になる。

【池上弁当】

価格は 1 個 100 元（約 500 円）でリーズナブルと言っていいだろう。

近くの道の駅のような場所で、弁当を開けるとまだ温かい。肉と揚げ物を中心にした内容で、もちろん独特のあの匂いがする。

■危機一髪

台湾の東側をさらに北上する。台湾東部最大の都市の花蓮を通過する。花蓮市の人口は約 10 万人だから台湾の北部や南部に比べて東部は圧倒的に人が少ない。山が海に迫っていて住む場所がないということだろう。

景勝地「清水断崖」にやって来る。清水断崖は太平洋にそそり立つ絶壁で、狭い道が続く。それゆえ駐車場も少ないので、車を停める場所を探していたら清水断崖を通り過ぎてしまった。それでも狭い道が続くので 3～4km 先に行ってから U ターンして戻ってくる。

そして問題は、今までは右側に海があり、右側に車を停めるスペースを探していたが、U ターンしたので左側が海になる。つまり右側通行なので対向車線を横切らないといけない。

小さな駐車場を見つけてウインカーを出して入ろうとするが、なかなか対向車が途切れない。後ろの車からクラクションを鳴らされてウインカーを戻して諦める。

もう少し走ると景色も良さそうな大きな駐車場がある。再びウインカーを出して入ろうとするが、やはり対向車が途切れない。しかし後ろの車から見れば、前の車は何をグズグズしているのかと見えたのだろう。私たちの車が左折しようとしたら、後ろの車が急に加速して左側つまり対向車線に出て追い抜いて行く。車内では一瞬「やばい！」との声が上がるが、運よく接触は免れた。まさしく危機一髪だった。

■清水断崖

何とか駐車場で車を停めて清水断崖の写真を撮るが、ガイドブックにあるような景色ではない。おそらく違う撮影ポイントがあるのだろう。

断崖をくり抜いたトンネルの出入り口が見え、そのトンネルができる前に使われていた道が断崖絶壁の狭いわずかなスペースを削って作られている。相当に無理して道を通したに違いない。

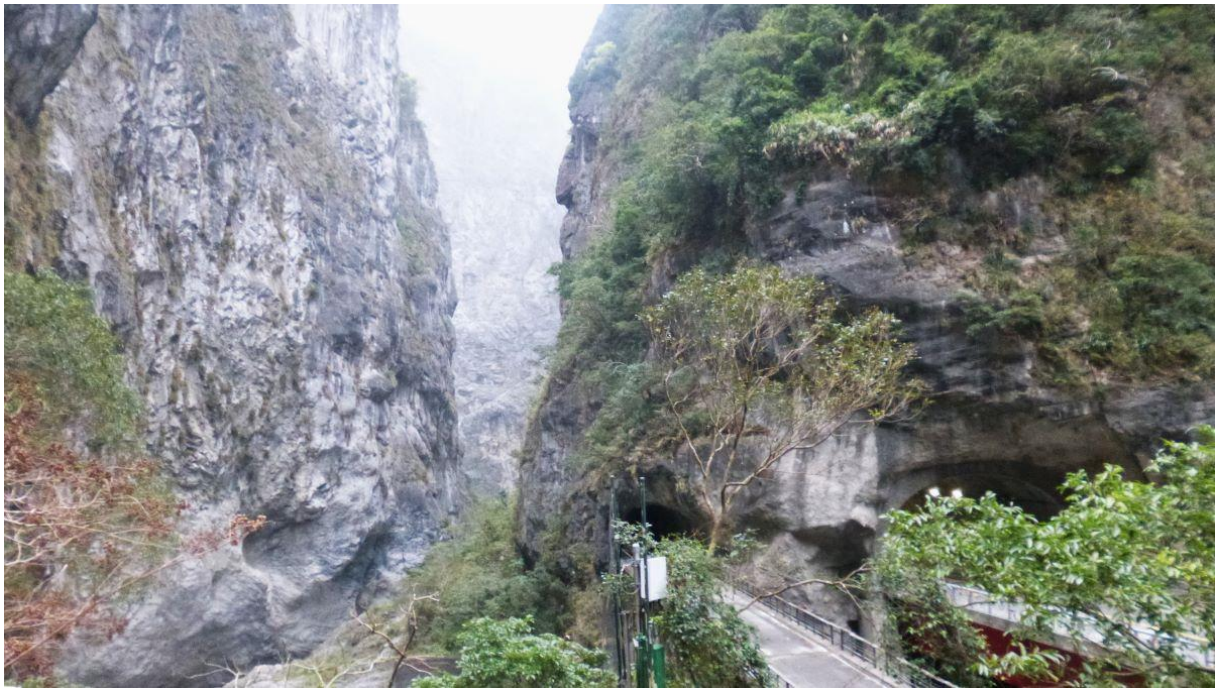
【清水断崖】

■太魯閣（タロコ）国立公園

清水断崖は台湾の東部にある太魯閣国立公園の中にある。実は清水断崖は国立公園の一部に過ぎず、そのエリアは太平洋沿岸から山岳地帯まで東西に約 41km、南北に約 38km とかなり広い。

太魯閣国立公園の見どころは何と言っても「太魯閣渓谷」で、太平洋にそそぐ立霧渓という川の渓谷になる。

立霧渓を遡り山間地に入ると左右に断崖が続き、高い山には雲がかかっている。深い谷の下を立霧渓の清流が流れている。くねくねした道路は時々橋を渡って川の左や右へと位置を変える。道路も橋も、新しく広い新道と古くて狭い旧道とがある。旧道には自動車も通れない狭い橋もあるから自動車が普及する前から景勝地として存在していて、継ぎ接ぎを繰り返していたことが分かる。



【太魯閣渓谷　右下に新旧 2 つのトンネルが見える】

狭くて低いトンネルや半トンネルでは、前を行くバスがセンターラインを大幅にはみ出して走行している。バスの屋根はトンネルの天井をこする寸前だから恐ろしい。

人が渡る吊り橋が川に架かっている。入口には中国語の看板があって「最大 8 人、橋を揺らすな、注意して渡れ」と書かれている。中国語は解せずとも漢字を読み解くと理解できるから漢字文化はありがたい。遠征隊には高所恐怖症の隊員もおり、揺らすなどはもってのほかだが、勝手に揺れるのは致し方ない。

【半トンネルの天井ギリギリのバス】

【吊り橋】

いつものように日本で同じような景勝地は無いかと思いを巡らすが、簡単に出てこない。似たようなものはあるがスケールが違う。それでもあえて言えば北海道の層雲峡が脳裏に浮かぶが、層雲峡はこんなに狭くてごちゃごちゃしていない。

そう考えると台湾の山は日本に比べて高くて谷が深い。個々の山は尖っていることになる。

■太魯閣のホテル

今夜泊まるホテルは太魯閣渓谷の下の方で、むしろ河口から近い。

部屋は 4 人一室で、ドアを開けてスリッパに履き替えて入室する。床から 50cm くらい高くなったところに畳が敷かれた 10 畳くらいのスペースがある。そこにダブルベッドサイズの布団が 2 つ、シングルサイズの布団が 2 つ敷かれている。シャワールームも 2 つあり、奇妙な造りをしているがラブホテルではなくファミリー向けといった感じがする。

2 階のベランダには屋根付きのスペースがあり、BBQ をして酒を飲んで騒ぐようになっている。いや酒を飲んで騒ぐとは書かれていないか。

買い込んできた弁当を広げてビールを飲み始める。セブンイレブンで買った弁当は日本の味と台湾の味が混ざったような味をしており、想像していたとおりで食べ易い。

【太魯閣で泊まったホテル】

花蓮をはじめ太魯閣国立公園一帯は 2024 年 4 月 3 日に発生した台湾東方沖地震で甚大な被害を受けた。それは私たちが訪問した後のことだが、一刻も早い復興を祈っている。

第五章　台湾中央山岳地帯

■標高 3275m

朝早くホテルを出発する。再び太魯閣渓谷を通って、私たちの車はくねくねした狭い道をひたすら登っていく。時々見かける道路標識には標高も書かれており、既に 2000m を超えている。

金馬トンネルを通過する。この先で工事をしているという情報を日本出発前に入手しており、昨夜のうちにホテルのフロントに詳しく訊ねていた。幸いにしてフロントの女性が少し日本語を理解して、スマホの翻訳機能も駆使して通行止めの実態を聞くことができた。

通行止めは崖崩れの修復工事のためで、それでも 1 日中工事をしている訳ではないので 1 時間に 1 回、10 分間だけ一般車両の通行を許している。11 時 00 分、12 時 00 分という毎時 00 分から 10 分間通行できる。

私たちは 10 時 45 分に現場に到着し、通行止めの解除を待つ車の列の最後尾に付けた。そして 11 時 00 分を少し過ぎて対向車線から車が来る。通行できるといっても片側交互通行で、上り下り同時に通行できない。しばらくしてからこちらからの通行が始まる。

工事区間は 200m くらい続き、山肌が崩れ落ちて土砂が道路を塞ぎ崖下にも大量の土砂が落ちている。道端には工事車両や重機が置かれて、かろうじて車 1 台通過できるルートを確保している。

現場を実際に見て、この工事は相当時間がかかりそうだと感じる。

工事現場を後にさら上を目指し登っていく。上空に青空が広がり、視界が開けていく。先ほどの道路工事をしていた崩落現場もやや遠いがはっきり見える。大きく山肌が崩れ落ちている様子が見てとれる。

【崩落による工事中通行止めの待ちの車列】

【工事中の崩落現場を遠くから見る】

標高 2374m の関原にやって来る。この辺りには何軒ものホテルが建っており、ガソリンスタンドもある。日本ではとてもこの標高では考えられない。

ちなみに日本の国道の最高標高地点は群馬県と長野県の間の渋峠で標高 2172m、国道にこだわらなければ山梨県と長野県の県境の大弛峠（おおだるみとうげ）で標高 2360m になるが、それよりも高い。

武嶺（ウーリン）に到着する。標高は 3275m、台湾の国道の最高標高地点で、駐車場があって多くの車やオートバイが停まっている。

【標高は 3275m にある武嶺の駐車場】

サイクリストも多い。しかしここまでどうやって登って来たのだろうか。何しろ平地に比べて空気が薄く、およそ 2/3 しかない。「ゼーゼー、ヒーヒー言っても登れるレベルではない」と自転車で台湾を一周したヨコさんが独り言を言っている。

サイクリストたちが「武嶺 3275m」と書かれた看板で記念撮影をしている。

ところがこの看板はよく見ると何かおかしい。

武嶺は右から書かれている。問題は「尺公 3275 高標」で、尺公はメーターだから“公尺”で、高標も“標高”が正しい。つまり漢字は右から書かれているが、数字だけが左から書かれている。

おそらく看板の裏側なのでこんな表示になったのだろう。だからサイクリストたちは正面から写真を撮っている。それにしてもセンスがない。

【武嶺 3275m の何かおかしい看板】

■日月潭

山を下って台湾のほぼ中央に位置する湖「日月潭」にやって来る。台湾最大の湖で湖面の標高は 749m、面積は 7.7 km²という。

ここでまた日本の湖ではどこと似ているのかと思いを巡らすと、神奈川県箱根町の芦ノ湖が標高 724m、面積 7.0 km²なので標高もサイズも似ている。

しかし日月潭は、昔は自然湖で面積は 4.6km² しかなかった。日本統治時代に発電所を作るためにダム湖にしたので広がって今の面積になった。

湖畔には遊覧船が発着する港が 3 カ所あり、その周辺に大きなホテルが林立している。日本有数の観光地の箱根の芦ノ湖と比べても、日月潭の方が賑やかに感じる。

私たちは湖畔を少し散策した後、遊覧船に乗って湖を一周する。

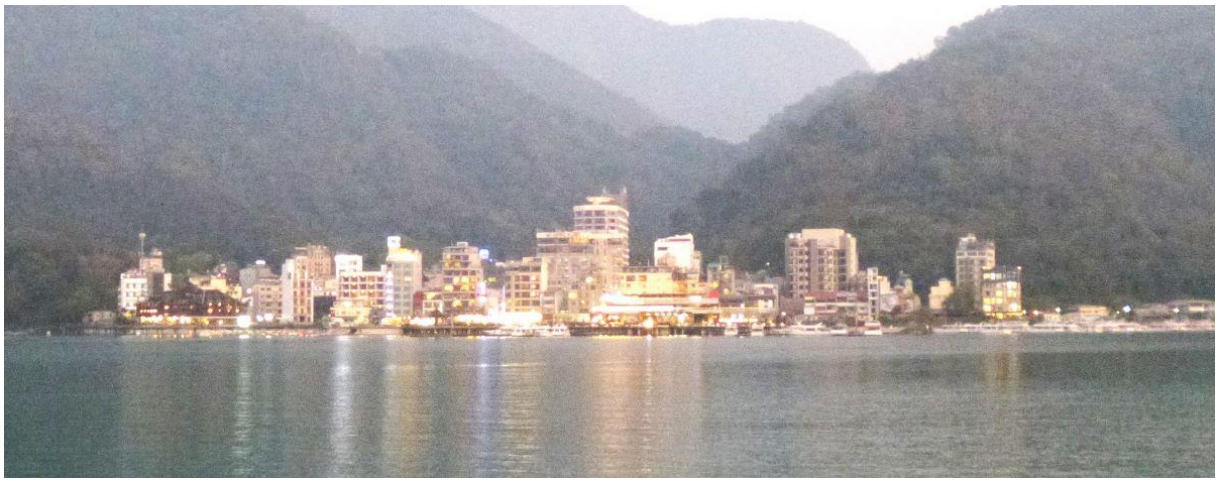
島の真ん中には原住民サオ族の聖地と言われるラル島がある。昔は今よりも大きな島だったが、日月潭をダム化した際に水位が上昇して最上部を残して現在の小島になった。

おそらく「日本人が神聖な湖を犯したが、それでもラル島は残ったぞ」というような言葉を発したのだろう。

【ラル島】

夕方なので山の端に太陽が沈むシーンを見ることができる。幻想的なシーンに私たちはもちろん、乗船している観光客たちも固唾を呑んで見入っていた。

船は港に戻る。照明で映えるホテル群が迎えてくれる。



【日月潭に 3 つある港の一つ】

■日月潭のホテル

湖岸のホテルにチェックインする。小ぢんまりしているホテルで小奇麗なロビーがあって、フロントにいる青年が英語と中国語でテキパキと対応してくれる。

夕食は宿近くの食堂に食べに行く。老街のような賑やかな通りが何本もあって、観光客が多く食堂は満席に近い。私たちは少し街はずれの地元の人々が食べている食堂に入り、そしていつものように隣のテーブルの美味しそうな料理を指差して「これと同じもの」と言って注文する。

せっかく日月潭に来たのでこの湖で獲れた魚料理も注文する。腹開きをしてうつ伏せにした魚を蒸し焼きにして、上から野菜を乗せて醤油ダレを垂らした姿で出てくる。この魚は大きくて食べやすく、そして美味い。

【地元食堂の魚料理】

日月潭の紅茶は台湾土産では有名なので、土産に紅茶を買うべく紅茶屋に立ち寄る。ここでも日本語ができる元看板娘がいて、彼女と話をする。日月潭紅茶の効能や入れ方を聞きながら、紅茶をご馳走になる。

ヒデさんが明日乗る予定のローカル鉄道の集集線について聞くと、彼女は「あの沿線もいいけれど日月潭の方がいいよ」とそっけない。逆に私たちが泊まっているホテルを聞かれ、「あそこの大将ねぇ、今は中国に行っていて息子が切り盛りしているよ」と教えてくれる。私たちはフロントにいた青年を思い出し、「彼はアルバイトではなく経営者だったのか」と言って相槌を打つ。

父親は遊びで中国に行っている訳ではないだろうが、息子への事業継承は上手くいっているようで他人事ながら何だか嬉しくなる。

朝鮮半島の南北朝鮮の国民は往来さえもできないが、台湾と中国は申請すれば比較的自由に往来できるらしい。

■車程駅

翌日、日月潭から少し離れた集集線の車程駅に向かう。駅に着くと観光客をチラホラ見かける程度であまり人がいない。

ここからローカル鉄道に何駅か乗って戻ってくるつもりでいたが、切符売り場が閉まっている。近くの土産物屋で暇そうに店番をしている女性に聞くと、昨年の台風で被害を受けて現在は運行休止中だという。

そんなことは紅茶屋の元看板娘は一言も言ってなかった。やはり“元”がついてはダメらしい。ホテルのフロントにいたあの息子に聞くべきだった。

【集集線の車程駅】

駅の状況から察すると、いずれは復旧させるつもりのようだ。日本統治時代に敷かれた鉄道なので老朽化しており、日本よりも山が急だから土砂崩れも多い。台湾の鉄道旅は運行情報に気をつけないといけない。

私たちはレトロでお洒落な駅舎や、線路とホームの風景を見物して駅を離れる。

■高速道路

次の目的地に向かうために最短距離の山道を行くか、遠回りになるが高速道路を利用して平地を行くか迷っていた。集集線の運行休止で懲りた私たちはガソリンスタンドなどで情報収集を行うと、誰からも山ルートは危険なので安全な平地ルートを勧められる。

一般道をしばらく走って高速道路に入る。ところが南行き線に乗るつもりが間違えて北行き線に乗ってしまう。慌てて次の出口で高速道路を降りて再度挑戦して南行き線に乗る。今度は成功し車内では拍手が沸き起こる。

高速道路に乗れたくらいで拍手が起こるとは、日本では日常茶飯事でも場所が変わると非日常になる。“旅は非日常への移動”と思っている私にとって、これが旅なのかと妙に納得してしまう。

台湾の高速道路は快適だ。最高時速 110km、道幅も広く路面の状態も良く走りやすい。日本の新東名高速道路を走っているような感覚になる。

後学のためにサービスエリアに立ち寄る。駐車場や建物は綺麗に整備されているが、駐車している車は少なく、フードコートや売店も空いている。店内の価格がかなり高いように思える。

■阿里山

台湾観光で人気の観光地「阿里山」を目指す。一言に阿里山といってもかなり広いので、その中心的な「阿里山国家森林遊楽区」に向かう。森林遊楽区は標高 2000m を超える山岳地帯で、遊歩道、バス、森林鉄道が整備されている。

森林遊楽区までの道がまた凄い。急傾斜かつ急カーブで「こんな場所によく鉄道を引いたよ」とヨコさんが感心している。阿里山は日本統治時代に木材運搬のために鉄道を敷いて、森林遊楽区の上の方まで続いていたが、現在は途中が運行中止になっている。

森林遊楽区の入場門にやって来る。ところが入場料が 1 人 300 元、駐車場代が 1 台 100 元なので合計 1300 元（約 6500 円）もかかる。

私たちはこれから鉄道に乗るのではなく、明日早朝の“日の出列車”の切符を買うためにやってきた。事前に購入しておかないと当日は長蛇の列に並び、最悪は売り切れる可能性もある。

しかし切符を買うためには入場しないといけない。切符の購入だけで本日も明日も 1300 元支払うのはさすがにもったいない。

私たちはしばらく考えたが妙案もなく、女性スタッフに相談するが、中国語しか解せず上手く意思が伝わらない。私たちだけでなく彼女も困っていると、幸いにも日本語が出来る若い男性スタッフが来てくれる。

彼と話して問題が解消される。入場券も駐車券も 24 時間有効で、時間内ならば入退場できるという。つまり本日 1300 元支払って入場し、明日の朝も再入場できる。これを知らなければ 1300 元を 2 回支払っていたのかもしれない。

ついでに明日の朝の駐車場の混み具合などを聞き、早めに到着することを促される。

切符を購入して、くねくね曲がった狭い坂道を下って宿に向かう。

■驚きの宿

本日の宿は阿里山の麓の街はずれの山の中腹にあり、今回の旅では最も田舎の宿になる。

満開の桜の木と段々畑が目の前にあって下は谷になっている。谷の向うの山から昇る日の出がこの宿の売りらしく、宿の名前が「サンライズ 23.5N B&B」になっている。23.5N は緯度で、北回帰線（北緯 23.3 度）とほぼ同じ、ということは夏至の日は太陽がほぼ真上になる。

2 階建ての建物は、田舎の宿と書いた割にはなかなか洗練されている。

部屋の中は木製の床になっており靴を脱いで入る。この造りは太魯閣で泊まった宿に似ていて、30cm 位高くなって板の間があり、そこに布団が敷かれている。

問題はその布団で、シングルサイズの 4 つの布団が隙間なく横一列に敷かれており、掛布団は 2 枚しかない。つまり 2 人が同じ掛布団で寝ることになる。さらにその間にはハート型のクッションまである。これはもう笑うしかない。

【宿の全景】

【敷かれていた布団】

私たちにはそのような間柄ではないので、このままではとても眠れそうもない。いやそのような間柄なら余計眠れないか。

しばし考えた末に掛布団を 2 枚追加してもらい、敷布団の 1 つを下の床に移動させ 3 組の布団を少し離して敷いた。これで何とか眠れそうだ。

■日の出鑑賞

布団を分けたのでぐっすり眠れ、翌朝は早く起きて宿を出発する。4 時 30 分に森林遊楽区に到着すると駐車場は満車に近い。森林遊楽区内のホテルの宿泊客が駐車しているらしい。ヒデさんが「混み具合を事前に聞いていてよかった」と言っている。

阿里山駅で日の出列車を待っていると、切符売り場には長蛇の列ができている。「昨日買っておいて正解だったよ」とヨコさんが口にする。

入線してきた列車に乗り込むと、定刻の 5 時 40 分を待たずに発車する。6 両編成で最後尾にはディーゼル機関車が付いており、機関車は客車を引いているのではなく押している。

【日の出列車】

この鉄道は日本統治時代に木材の運搬のために敷かれた鉄道で、現在は観光列車として阿里山駅を起点に運行している。

阿里山駅から終点の祝山駅までの運行距離は 6.2km で、そこを 25 分で運行している。従って時速 15km にも満たない自転車並みのスピードで列車が走る。

車内アナウンスが中国語、英語に続いて日本語でも流れる。これには少し感激する。日本人観光客が多いからだろうが、この鉄道が日本統治時代に敷かれたことへの感謝の意かもしれない。

標高 2216m の阿里山駅から標高 2451m の祝山駅に登ってくる。さらに歩いて展望台に登る。

案内看板には日が出るポイントが書かれており、この時季には「玉山（ぎょくさん）」の左の端から登るはずだが、残念ながら曇っている。それでも薄っすらと明るくなっており、あの辺りから出てくることが想像できる。さすがに標高 2500m の高所なので眼下に雲海が見える。

玉山の標高は 3952m で富士山よりも高い。そのため日本統治時代は日本の最高峰になるので、玉山を明治天皇が“新しい高い山”で「新高山」と名付けた。この山の名前が真珠湾攻撃の時の出撃命令「ニイタカヤマ ノボレ」に使われた。

その歴史的な新高山が私の目の前にあり、そこから今まさに日が昇ろうとしている。この状況に置かれ、さすがに感無量になる。

【玉山（新高山）の左の端から昇る日の出】

残念ながら雲で日の出は見られなかったが、私たちは満足して再び列車で下山する。線路の脇の道はハイキングコースになっており歩いて降りる人たちも多い。

■奮起湖

森林遊楽区を後にして「奮起湖（ふんきこ）」に行く。湖と書かれているが湖ではない。台湾では窪地のことを湖という。三方を山に囲まれた窪地なので、その形から昔は「塵取り湖」と呼ばれていた。しかし塵取りでは中にある家や人間はチリやゴミになってしまう。さすがに塵取り湖はないだろうと奮起湖に改称された。

ただ標高 1400m なので、街が雲の中に入ることもある。そうすれば湖にも見えるのだろう。

奮起湖にも老街がある。ここが台湾で最も高い場所にある老街で、九分の老街にも似ているので“南の九分”とも呼ばれている。確かに雰囲気は似ているがスケールが物足りない。各店で売る商品の価格をつり上げて「台湾一高い老街」にすべきだろう。

その老街のセブンイレブンに入る。入口にはこの店が 4000 店舗目のセブンイレブンだという看板が掛かっている。調べてみると全世界のセブンイレブンの店舗数は約 84000 店もあり、日本国内はその 1/4 の約 21000 店にすぎず、日本以外のアジア地域に非常に多くある。私のセブンイレブンに対する認識は完全に変わってしまった。

■十字路へ

かつては中西部の中核都市の嘉義市から奮起湖を経由して阿里山駅、そして祝山駅まで鉄道が繋がっていた。しかし現在は線路が寸断されて阿里山駅までは行けない。奮起湖駅から 2 駅先の十字路駅までは繋がっているが、観光客の多くは利便性の良い奮起湖駅で降りてバスで阿里山に向かう。

私たちは奮起湖駅で多くの観光客が降りてガラガラになった列車に乗って十字路駅に向かう。標高 1400m の奮起湖駅から標高 1534m の十字路駅までの線路は曲がりくねってガタガタなので乗り心地は最悪だ。

十字路駅に到着する。駅にはホームもなければ改札もない。列車を降りて線路の脇を歩いて何となく駅の構内から外へ出る。上を見上げると満開の桜が私たちを出迎えてくれる。下界では桜は散っているが、ここは標高が高いのでまだ見頃だ。

【十字路駅】

日本人の中年夫婦が私たちに日本語で話しかけてくる。ヒデさんが着ていた飛鳥Ⅱクルーズのウインドブレーカーを見て日本人だと思ったと言っている。

彼らは鉄道とバスを駆使して台湾を一周しており、そろそろ 2 週間になるという。私たちがレンタカーで回っていると言うと、「バイクが多く、狭い道をよく運転しますね」と驚いている。

彼らは体の無理が効くうちには海外旅行をしたいと言っており、アメリカのアリゾナでは何百キロも何もない道を奥さんが 1 人で運転したというから今度は私たちが驚いてしまう。

台湾の印象を聞くと、奥さんは台湾料理の強烈な臭いが未だに馴染めないのでセブンイレブンの弁当に助けられていると言っている。何となく私たち熟年台湾遠征隊に似ている。

彼らも今朝早く私たちと同じ列車に乗って日の出を見に行き、そのために昨夜は阿里山駅近く

のホテルに泊まったが、1 泊 6 万円の宿泊費に驚いたと言っている。車がなければ日の出列車に乗るには高いホテルに宿泊するしかない。

私たち、いや予約したヒデさんは、それは避けるためにかなり離れた所に宿をとったのだろう。それは地図を見ながら距離と宿泊費を天秤にかけながら宿を探すもので実に面倒で大変な作業になる。これは感謝しかない。

第六章　台湾西部、そして帰国

■八田記念公園

山岳地帯から外れて台湾南西部の「烏山頭ダム」にやって来る。このダムは日本統治時代の 1930 年に日本人技師の八田興一（はったよいち）が完成させた。

完成当時は東洋一の大きさを誇り、巨大ダムと総延長 16000km の給排水路によって水害や干ばつの被害が多かった嘉南平原が台湾最大の穀倉地帯になった。

そのため八田興一は台湾の教科書にも載るほどの英雄になり、烏山頭ダムに隣接して記念公園ができた。広大な公園内には興一と家族が暮らしていた家屋などを復元し、ダムの技術的価値を紹介する八田技師紀念室もある。

今から約 100 年前、興一が 34 才の時に工事を始め、10 年かけて完成させた。日本統治時代とはいえ遠い異国の地で、技術者でありながら現場指揮を任され、言葉の壁もある中で、大変な苦労をしたに違いない。

ダムを臨む場所に興一の墓があって、その前に興一の座像がある。私たちは墓の前で手を合わせて、彼の功績をたたえた。そしてなぜか「ありがとう」という言葉が誰からともなく発せられた。

【烏山頭ダムのダム湖と堤防】

【八田興一の墓と座像】

実はこのダムを見学したいと提案したのは私で、八田興一は私の友人が尊敬しており、台湾に行ったら絶対に見るべき場所だと私に強く勧めていた。

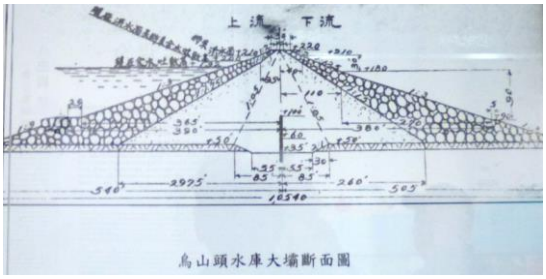
私はその友人に感謝しないといけない。日本人が台湾のためにこれだけ尽力して役にたったということに誇らしく思う。

■ダムの構造と工法

若き技師の八田與一はダムを造った功績はもちろん、彼のダム技術の素晴らしいが絶賛されている。烏山頭ダムのダム湖は非常に大きく、長く広い堤防に囲まれたロックフィルダムで、それをセミハイドロリックフィル工法という新しい技術で造った。

一般的にダムの堤防は反り立つ壁をイメージするが、ロックフィルダムの堤防はなだらかなで、表面は大きな岩を積んで満たしている。だからロックフィルという名前が付いている。

堤防の中心部に粘土質のコア材があり、その両側に砂や砂利からなるフィルター材が積まれ、さらにその外側に大きな岩を敷き詰めて強度を高めている。



【ダムの断面図（八田技師紀念室で撮影）】

セミハイドロリックフィル工法は、大小の石が混じり合った土砂を強力な水流に乗せて流すと大きい石は早く沈殿し、小さい石は遠くまで運ばれるという現象を応用している。つまり大量の水で土砂を流し、外側に大きな石を積み、中央部に細かい石を積むようにした。水の力を利用しているので重機や人手をあまり使わずに巨大ダムを造った。

この工法は当時世界の最新技術で、日本人として八田與一が初めて使ったらしい。

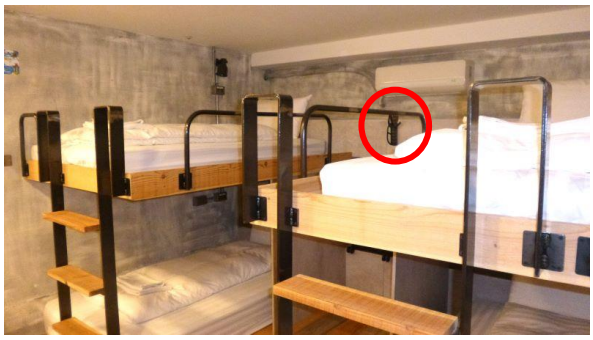
■レンタカー返却

台南市でレンタカーを返却する。借りる時はすったもんだしたが、返却は何の苦労もなかった。高速道路もこの時点で通行料金が分かり 620 円だった。1 回間違えた割には安いように思える。

走行距離は 1087km、ガソリン 51.7L を使用して平均燃費は約 21km/L だった。トヨタのハイブリッド車なので燃費は良い。ガソリン代の総額は 7832 円で、1L 約 151 円なので、日本のガソリン代と同じか安いくらいだろう。（2024 年 4 月現在で比較）

■ワクワクするホテル

レンタカーを返してホテルに向かう。ところがこのホテルがなかなか見つからない。それもそのはずで雑居ビルの 1 フロアだけを使用して運営しているホテルで、エレベータの階数表示の小さな看板しか案内がない。


【2 段ベッド　赤い〇が自転車立て掛け金具】

そんな分かり難いホテルでも宿泊客は多い。その理由は宿泊費が安いこともあるが、個性的な部屋があることだろう。

私たちの部屋は自転車旅行者用の 4 人部屋で、2 段ベッドが 2 つあり自転車 4 台を立て掛けるスペースとそのための専用金具がある。実に珍しい部屋なので童心に帰ってワクワクしてくる。

シャワールームは異常なほどに広くて、トイレも洗面台も付いているのに仕切りやカーテンがない。これではシャワーを浴びると水浸しになってしまう。

私は「このシャワールームは誰が考えたのだろう、とても使い物にならない」と言う。

ヨコさんが「このシャワーは人間用ではなく、自転車用だよ」と教えてくれる。その言葉には納得するが、再び私は「人間はどこでシャワーを浴びるの？」と聞く。

ヒデさんが「シャワーは共同で、部屋の外にあるよ」と言っている。この宿は人間ではなく完全に自転車ファーストになっている珍しい宿になっている。

私は「自転車ファーストの宿だね」と言い「瀬戸内海のサイクリストの聖地“しまなみ海道”にこのような宿を作れば儲かるね」と続ける。

すると今度はヨシさんが「自転車ファーストいいね、それなら自転車好きが殺到するかも」と反応する。

この宿に限らず、面白い宿や不思議な宿、とんでもない宿は世の中にはいくらでもある。そしてそれらを生み出す人間のアイデアも無限にある。

私は会社勤めをしていた技術者時代に、先輩がよく使っていた「アイデア無限」という言葉を思い出した。そしてその言葉は今でも私の好きな言葉の一つになっており、技術ではなく新しい旅を考える時にとても役立っている。

■安平（あんぴん）

レンタカーを返却したので、タクシーを拾って台南市の安平地区に繰り出す。4 人なのでタクシーが普通に使えることにほっとする。

安平には観光名所が集まっている区域がある。私たちは「安平開臺天后宮」という寺院を拝観し、隣のガジュマルの樹に覆われた倉庫「安平樹屋」を見て、「安平堡」というオランダが築いた城塞の跡を訪れる。安平堡にはイミテーションだが実物大の大砲が海に向かって置かれている。

台湾の歴史で触れたように、今から 400 年前の 1624 年にオランダ統治が始まる。その頃にこの安平堡も造られた。つまりここが台湾文明開化の始まりの地だと、私は考える。

ここまでの旅で日本統治時代のものは多く見てきたが、初めてオランダ統治時代のものに出会った。そしてその時代の日本とオランダ、そして台湾に想いを馳せる。

【安平樹屋】

【安平堡】

400 年前の日本は、徳川家康が亡くなって間もない頃で、その 15 年後の 1639 年から鎖国が始まる。しかし鎖国をしても日本とオランダの交易は続くので、日本とオランダの歴史が始まった時期になる。この安平には日本に渡るオランダ船が寄港し、日本とオランダと台湾の文化交流の十字路になっていたのだろう。

■ランタンフェスティバル

今年は台南市誕生 400 年という節目の年なので台湾最大の光の祭典「ランタンフェスティバル」が開催される。それも本日、この安平で開催される。

会場の安平港付近の公園には多く人が集まっており、方々でコンサートやストリートミュージシャンの演奏もあって屋台も出ている。当然私たちも飲んで食べているので、トイレに行く。すると面白いトイレを発見する。

トラックの荷台を改造した移動式のトイレで、荷台には男女別のトイレがある。男性用に入ると小便器が 5 つ、大便器が 2 つあって並ばずに用を足すことができた。

私は 2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震を思い出した。被災地にこんな移動式トイレがあれば良かったのにと、他のメンバーに話すと彼らも大きく頷いてくれる。

【トラックの荷台の移動式トイレ】

このトイレは 2024 年 4 月 3 日に発生した台湾東方沖地震でも活躍したに違いない。

【TAINAN400 と描かれたドローンショー】

暗くなってランタンフェスティバルが始まる。私は十分駅のランタン飛ばしのようなものと思っていたが、ランタンは飛ばさず夜空のドローンショーになっている。たくさんのドローンを発光させ、色を変え、ショーを演出する。夜空に建物や文字が浮かび上がり、地上からはレーザー光線の照射と盛大な花火が打ち上げられる。

■5 時間の鉄道旅、最後の晩餐

台南から台北まで 5 時間かけて列車で移動する。新幹線を使えば 2 時間足らずだが、それでは面白くないから在来線の特急列車を予約した。実はこの予約は日本からできなかったので、初日に華陳さんに頼んで予約してもらった。

【入線してきた列車】

【列車に模した売店】

ビールとサンドイッチを買い列車に乗りこむ。列車は 12 時 02 分に台南駅を出発する。

台湾西部の平野を北上している。水田が多くあり、八田與一が造った烏山頭ダムから水を引いた水田だろうかと考えながらビールを飲む。

遥か彼方に山が連なっているのが見える。あれが阿里山でさらに向こうに最高峰の玉山つまり新高山があるのかなどと考えてビールを飲む。

海辺の近くには風力発電を行うたくさんの風車がある。どの風車も勢いよく回っており、風が強い地域なのだろうと思いながらビールを飲む。

最後のビールを飲み干して 17 時 15 分台北駅に到着する。

台湾に来て初日に泊まった台北のホテルで再び華陳さんと合流する。そして数日前に女性陣が打ち上げで美味しかったと写真を送ってきたレストランで、最後の晩餐を楽しむ。

かくして私たち熟年台湾遠征隊の大遠征が終わりになる。

■空港にて

帰国する朝、桃園空港に行くと毎年恒例の滑走路整備のため飛行機の発着が遅れると掲示板に表示されている。飛行機には定刻に搭乗するが、離陸許可おりず、滑走路で 1 時間待機する。

日本人乗客から「定期整備は事前に分かっていたはずなのに、なぜ手を打たなかったのか」とブーイングの声が聞こえる。

私も同様に腹立たしくなって、憤慨したが、それと同時にあることを思い出した。

それは高雄でローラさんが「日本人は時間に正確、いや時間に厳しい」と言っていたことで、私は“厳しい”という言葉が気になっていた。いや、その言葉の真意を理解できないでいた。

滑走路で 1 時間待ってブーイングを聞いて、その真意がなんとなくだが、理解できてきた。

事前に分かっていたら策を講ずるのは日本では当たり前だ。何事にも効率優先、時間厳守で仕事をしてきた日本人なら当然で、ましてや公共交通機関なら言わずもがなだろう。

それはある意味、時間をも支配しようとしているように思える。その姿勢が時間に“正確”を通り越して“厳しい”になるのだろう。

その厳しさは日本人の強みなのかもしれないが、それが世界の人々にはどう映るのだろうか。

終章　旅を終えて

■台湾を思う

今回の台湾は私にとっては 4 回目の訪問になる。ただ今回ほど台湾を肌で感じたことはなかった。それはレンタカーをはじめ様々な交通機関を利用してほぼ台湾一周し、好んで地元の人たちが利用する食堂で食事をとり、多くの親切に助けられたことからかも知れない。

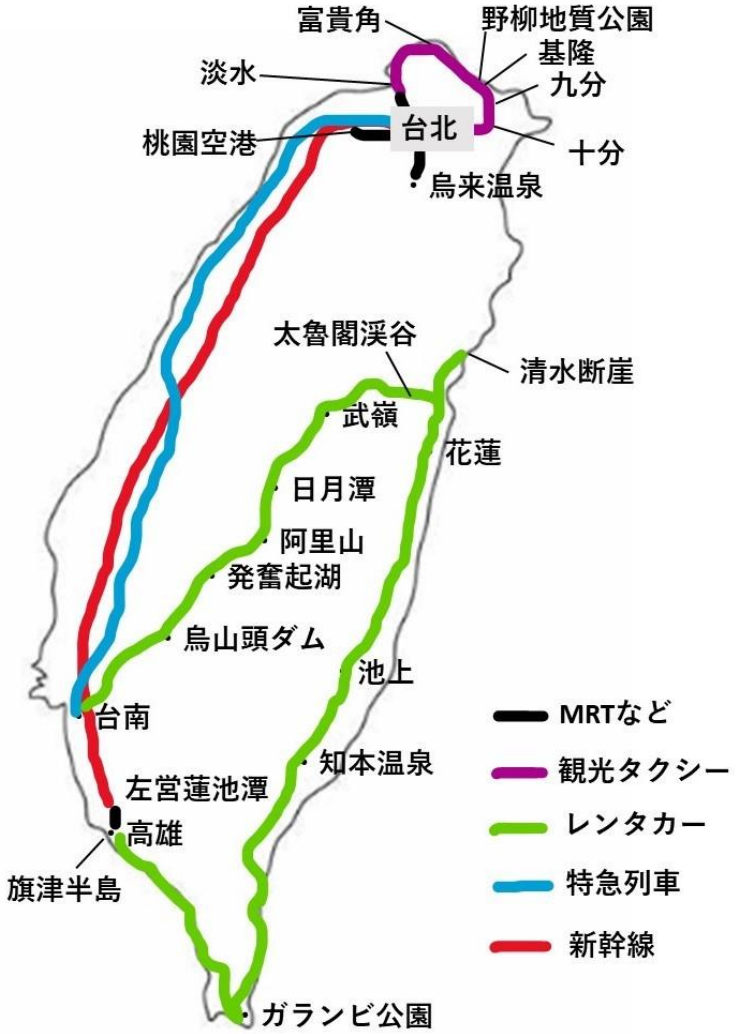
台湾には親日家が多く日本との関係も良好。両国の関係も以前にも増して深く理解できた。そのため台湾を単なる隣国ではなく特別な国だと思うようになった。

台湾には自然や歴史的建造物が多くあるので世界遺産に登録されても不思議ではないが、世界遺産は国連機関のユネスコが管轄している。残念ながら国連を脱退した台湾にはその資格がない。

台湾の国際的な立場は微妙で、特に中国との政治的問題はいかんともし難い。

私たちの力では何ともならないことだが、せめて台湾に足を運んで台湾の人々と交友を深めることで、明日の台湾を創る一助になれば幸いだ。

■訪問地の地図



■旅の記録

実施は 2024 年 2 月 20 日（火）～3 月 3 日（月）の 13 泊 14 日、その行程を示す。本文の記述と順番などが一部異なるが、以下の記録が正しい。

・1 日目　大阪の保養施設にて関東組など 5 人が前泊、前夜祭

・2 日目　関西空港で 8 人合流、14 時 55 分関西空港発のエバー航空便、
桃園空港着、オンライン入国、空港で両替、悠遊カード購入、MRT で台北へ移動、
ホテル「Green World ホテル」にチェックイン、華陳さんと落ち合い
松山の「饒河街（じょうががい）観光夜市」で夕食、ホテルに戻る

・3 日目　9 時ホテルを観光タクシーで出発、平渓線の「青桐」駅、列車で「十分」駅へ
十分駅でランタン飛ばし、観光タクシーで「九分」へ行き観光、
「瑞芳美食広場」（フードコート）で昼食、基隆の「中正公園」見物、
「野柳地質公園」見物、最北端の「富貴角公園」、淡水で観光タクシー下車、
「麻辣食堂」で鍋料理の夕食、淡水から MRT でホテルに戻り連泊

・4 日目　8 時 30 分ホテル出発、台北市内観光（龍山寺、総統府、介寿公園、中正記念堂）、
101 タワー地下のフードコートで昼食、MRT で新店駅へ、バスで「烏来温泉」へ
15 時ホテル「烏來温泉山荘」にチェックイン、烏来の老街散策、
「鳥来伯担仔面」で夕食、ホテルに戻る

・5 日目　10 時 30 分ホテル出発、トロッコ列車で「烏来滝」、竹筒飯とバナナちまき購入
ホテルで昼食、バスと MRT で台北へ、15 時 21 分発台湾高鉄（新幹線）乗車
高雄左営駅到着、MRT で信義国小駅へ、「リーズ（麗尊）ホテル」チェックイン、
MRT で美麗島駅へ行き、「六合観光夜市」で夕食、ホテルに戻る

・6 日目　9 時ホテルでローラさんと合流、MRT 西子湾駅へ、「旗津半島」に船で渡り、
灯台と海岸散策、船で戻り「哈瑪星（はません）台湾鉄道館」、ライトレール乗車、
スーパーでパンなど購入しフードコートで昼食、左営駅まで女性陣を送り、
「左営蓮池潭」まで歩き散策、「北極玄天上帝神像」を参拝、タクシーで左営駅へ
MRT で信義国小駅へ、レンタカー店（和運租車高雄中正站）で手続き、
レストラン「華饌精緻麺食館」で夕食、ホテル横のコインランドリーで洗濯
ホテルに連泊

・7 日目　8 時 30 ホテル出発、レンタカーを借り、最南端へ、
最南端の「ガランビ公園」散策、駐車場近くの食堂で昼食
16 時知本温泉「富野温泉休閒会館」にチェックイン、温泉街の食堂で夕食

・8 日目　9 時ホテル出発、池上駅前で弁当購入、道の駅「富里郷稲草芸術季節」で昼食、
「太魯閣（タロコ）国立公園」の「清水断崖」を見物、
ホテル「リーウーズオクン B&B」チェックイン、「太魯閣渓谷」をドライブ
コンビニで弁当など買いホテルで夕食、ホテル泊

・9 日目　8 時 30 分ホテル出発、コンビニで弁当など購入、「太魯閣渓谷」、「天祥公園」、
金馬トンネル先の工事現場に 10 時 45 分到着し待機、11 時 05 分に通過、
関原 2374m、標高 3275m の「武嶺（ウーリン）」で昼食、「日月潭湖」に到着
湖畔の水社地区を散策、日月潭周遊道路経由して伊達邵地区へ、

16 時に湖岸の伊達邵地区のホテル「原宿旅店」にチェックイン、
遊覧船に乗り 40 分間、ホテル近くの食堂で夕食

・10 日目 8 時 45 ホテル出発、車程駅に行くが列車運休中、高速道路で南行、
セブンイレブンで昼食、「阿里山国家森林遊楽区」到着
翌日の日の出列車の切符購入、「奮起湖」老街のコンビニで夕食の弁当など購入、
17 時民宿「サンライズ 23.5N B&B」チェックイン、宿で夕食、

・11 日目 朝 3 時起床、3 時 45 分宿を出発、4 時 30「阿里山国家森林遊楽区」に到着、
5 時 35 分登山列車に乗り 6.2km、25 分間乗車、標高 2451m の「祝山駅」到着、
歩いて標高 2500m の展望台へ、標高 3952m「玉山」を臨み、日の出鑑賞、
8 時 40 分ホテル帰着、宿で朝食、休憩して奮起湖駅へ
11 時 30 発奮起湖駅から十字路駅まで列車乗車、十字路駅周辺を散策
13 時 50 分発列車で奮起湖駅に戻り、15 時に宿に到着、宿近くの桜の花見、
宿の夕食を別料金で食べ、連泊

・12 日目 8 時 40 宿を出発、「烏山頭ダム」、「八田記念公園」見物、台南でレンタカー返却、
レンタカー走行距離 1087km、ガソリン 51.7L で燃費は約 21km/L
コンビニのイートインで昼食、13 時ホテル「台南府城窩旅」に到着、
ホテル受付から情報収集、14 時にホテルチェックイン、
タクシーで安平地区へ移動、「安平開臺天后宮」、「安平堡」、「安平樹屋」、
安平の老街散策、川沿いのレストラン「周氏蝦捲」で夕食
「ランタンフェスティバル」を見物、「林百貨店」で買い物、ホテルに戻る

・13 日目 台南の市内散策、11 時チェックアウト、コンビニでビールとサンドイッチ購入、
12 時 02 分台南駅発特急（海岸ルート）に乗り台北へ、17 時 15 分台北到着、
17 時 45 分ホテル「Green World ホテル」にチェックイン、華さんと合流
レストラン「甘妹寿堂」で夕食

・14 日目 9 時ホテル出発、MRT で桃園空港へ、1 時間遅れで離陸、関西空港帰着、
新幹線に乗り、22 時過ぎ帰宅

飛行機代と台湾でかかった費用の合計は 1 人当り約 225000 円、この他に国内前泊と移動費用として約 33000 円が発生している。（以下全て 1 人分に換算）

・交通費　約 115130 円

飛行機（関西空港～桃園空港 往復）	65675 円
台湾新幹線（台北～高雄 片道）	5623 円
台湾鉄道（台南～台北 片道海線）	2885 円
レンタカー（1 台で 101796 円）	25499 円
高速道路（1 台で 620 円）	155 円
ガソリン代（1 台 51.7L で 7832 円）	1958 円
観光タクシー（1 日 8 人乗車で 1 人分）	6217 円
遊覧船（日月潭）	2000 円
トロッコ電車やローカル電車	2490 円

MRT、バス、	約 2000 円
タクシー　3 回分（1 人分）	630 円

・宿泊費　81976 円

台北「Green World ホテル」3 泊	23107 円
烏来温泉「烏來温泉山荘」	6557 円
高雄「リーズ（麗尊）ホテル」2 泊	16690 円
知本温泉「富野温泉休閒会館」	8486 円
太魯閣「リーウーズオクン B&B」	5352 円
日月潭「原宿旅店」	5720 円
奮起湖「サンライズ 23.5N B&B」2 泊	10094 円
台南「台南府城窩旅」	5970 円

・その他、飲食費など　約 60400 円

Wi-Fi ルータ（1 台 13 日分の 1/4）	4125 円
駐車場、入場料など（1 人分）	3212 円
食事や酒代（1 人分）	約 20000 円
国内費用（横浜～関空往復、宿泊費）	約 33000 円